

参加学生の声

子どもたちが

「安心できる居場所」の提供を

お子さんとその保護者の方と一緒に、無造作に描いた線からお菓子を想像し、色を塗ってお菓子の詰め合わせの絵を描いたり、手のひらの形を型取り、その中に自分の好きなものを書いていく遊戯療法的な活動を行いました。また、おもちゃで一緒に遊ぶなどの関わりも行いました。

参加されたお子さんは、最初は緊張した様子で、自分のやりたいことを伝えるのが難しそうな印象でしたが、次第に慣れいき、自分の好きなものを自由に描いたり、おもちゃで楽しそうに遊ぶ姿が見られるようになりました。保護者の方も一緒に活動に参加してくださり、お子さんと一緒に絵を描いたり遊ばれる様子はとても楽しそうで、親子のあたたかな関係性も感じることができました。子どもたちが自由に遊んだり創作活動に取り組めるような「安心できる居場所」を提供することで、素直な気持ちで活動を楽しんでもらえる点に、この活動の意義を感じました。

「気づき」や「気持ちの変化」、

「他者との関わり」の有意義さを、

子どもたちにも感じてもらいたい

遊戯療法や絵画療法について大学で学び、それらが自己表現やセラピストとのラポール形成に役立つということを理解していました。講義の中で実際に自由な創作活動を体験し、自分自身の内面を表現できたこと、また友人と作品を共有したり一緒に制作する中で、他の人の表現方法に気づいたり気持ちの分かち合えたことが印象に残っています。

今回の活動を通して、そのような「気づき」や「気持ちの変化」、「他者との関わり」の有意義さを、子どもたちにも感じてもらいたいとい



東京家政大学大学院
臨床心理学専攻 A.W.

う思いを持って支援にあたりました。また、ラポールの形成についても、今回の経験でその大切さと効果をより実感することができました。最初は保護者の方としか話せなかった子どもが、次第に私たちにも心を開いてくれるようになった様子を見て、遊戯療法や絵画療法の持つ力を実感しました。

「自分の居場所」と

「みんなの居場所」を

子どもたちにとって、この大学内居場所事業や教育支援センター（板橋フレンドセンター）が安心して過ごせる居場所として受け入れられ、継続的に来てくれる子が増えていくといいなと思います。そうした中で、子どもたち自身の「やりたいこと」や興味を聞きながら、主体性を大切にした新たな活動にも挑戦していきたいです。

私たちが用意する活動だけでなく、子どもたちが自ら提案してくることに柔軟に対応し、また、他のお友だちとの交流が自然に生まれてくるような関係性づくりに力を入れたいです。

最終的には、子ども一人ひとりととっての「自分の居場所」とであると同時に、みんなが安心して過ごせる「みんなの居場所」としての機能も果たせるよう、より開かれた環境づくりに挑戦していけたらと思っています。

地域連携
事業

板橋区

心理カウンセリング学科・
大学院臨床心理学専攻区内の不登校児童・
生徒に大学内の居場所を提供する
「大学内居場所事業」

板橋区との連携活動として「大学内居場所事業」を6月からスタート。板橋区在住または同区立学校在籍で、不登校・不登校傾向のある児童・生徒（小学校1年～中学校3年）を対象とした取り組みです。臨床心理学専攻の大学院生、心理カウンセリング学科の学部学生がボランティアスタッフとして参加し、月に二度、大学の構内で児童・生徒と一緒に勉強や体験学習を行っています。また、院生が企画した交流ツールの提供、学生ボランティアによる子どもの支援、保護者支援なども実施しています。

※利用は板橋区在住または板橋区立学校在籍の不登校・不登校傾向の児童・生徒に限る。

「板橋フレンドセンター」への学生派遣

さまざまな理由で学校に行くことができない児童や生徒が、探究的な活動や体験活動、創作活動、他者との交流などを通じて、自己実現を図るための場所。

心理相談室もあり、通級する児童・生徒の相談にも応じています。心理カウンセリング学科の学生派遣は5月から開始しており、年間約950時間を予定しています。

養護教諭に

なりたいたいという思いをもって

私は、小学生の子と一緒にボードゲームやカードゲーム、折り紙などをして遊びました。小学生の子とかかわることが久しぶりだったので最初は少し緊張していましたが、一緒に遊ぶうちに少しずつ緊張がほぐれ、自然と会話や笑顔が増えていったように思います。一緒に遊んだ子も最初は緊張してお母さんと一緒に参加していましたが、時間が経つにつれて、私の声かけに返事をしてくれたり、表情が柔らかくなったりと少しずつ打ち解けていく様子が見られました。このボランティアにはこれまで「二回参加し、どちらも同じ子どもと関わる」ことができました。お母さんから、「二回目は恥ずかしくて自分から関われなかったけれど、次は自分からお姉さんに声をかけたいと言っていた」と聞き、その言葉にとても感動しました。こうした子どもの成長を間近で感じられたことで、養護教諭になりたいという思いをより一層強く持つようになりました。

安心して心を寄せられる人との
つながりも居場所になる

今回のボランティア活動を通して、これまで授業で学んできたカウンセリングの技法やカウンセラーに求められる態度や役割、遊戯療法などの内容が特に活かされたように感じました。カウンセリングにおいて大切とされる相手を理解しようとする姿勢や、寄り添いながら肯定的に関わる態度は、日常の人との関わりの中でもとても大切なことだと改めて実感しました。

特に、子どもと関わる際に「その子のことを理解しよう」という気持ちで、子どもに寄り添おうとする姿勢と肯定的な態度が、子どもにとっての安心感につながるのだと感じまし

た。また子どもの居場所とは、物理的な場所だけではなく、安心して心を寄せられる人とのつながりも居場所になるのだと実感しました。

学校現場での経験を
増やしていきたい

このボランティアに参加したことで、子どもと関わる楽しさややりがいを実感し、もっとたくさんの子どもと関わってみたいと思うようになりました。そのため、今後は学校ボランティアに積極的に参加し、さまざまな年齢の子どまと関わってみたいのです。実際の学校現場で子どもたちがどのようにして過ごしているのかを見たり、先生方の支援の在り方を学んだりすることで、自分の視野を広げるとともに、養護教諭としてどのような支援が求められるのかをより具体的に学び、考えるきっかけにしていきたいです。今回のボランティアを通して得た学びを大切にしながら、今後も授業に真剣に取り組むとともに、実習やボランティアなどの実践的な経験を積み重ねていきたいです。そして、子どもたちを支援するために必要な知識や技術、実践力を着実に身につけていきたいです。



人文学部
心理カウンセリング学科 M.K.